

『書記』は建て前から「斬った」ことにしたのであろうし、「伝承」はこれを踏^つえて、入山の年を配慮したものであろう。

(『市民の古代』第十四集掲載)

『吾平山御陵考』(現代語訳)

佐野経彦 著

平野雅曠 訳

鶯^う鶯^が草^ふ草^さ不合^あの尊^みの陵^とは、明治七年の明治天皇の「御裁下」では、大隅の国肝^き原^{げん}郡^{ぐん}始^あ良^{ひら}郷^か上^か名^な村^{むら}の鶴^{つる}戸^の窟^{くわ}とされた。

しかし、鶯鶯草草不合の尊の陵のあった場所については、さまざまな異説もあった。

ここでは、肥後の国(熊本県)山鹿郡日向村(現鹿本郡菊鹿町)説を紹介する。

天津日高彦波限建鶯鶯草草不合

の命の御陵について

豊前小倉 企救の民 佐野経彦

つしんで考えを述ぶ。

『日本書紀』は「彦波瀲武鶯鶯草草不合の尊は、西洲の宮(九州の高千穂の宮)でかくれられたので、日向の吾平山上の陵にほうむった」といつている。申すも恐多いことであるが。